

第1回 二本松市未来戦略会議 会議録

日 時 平成30年8月31日（金）
午後2時00分～午後4時10分
場 所 二本松市役所6階「正庁」

1 開 会

（企画財政課長）

本日は、何かとご多用のところ、ご出席を賜りありがとうございました。
只今より、第1回 二本松市未来戦略会議を開会いたします。
はじめに、二本松市長より委嘱状の交付をさせていただきます。
お名前をお呼びしますので、その場でご起立をお願いいたします。

2 委嘱状交付

○市長より委員各位へ委嘱状を交付。

（企画財政課長）

続きまして、本日、出席しております二本松市の職員をご紹介します。
二本松市長 三保 恵一（みほ けいいち）です。
副市長 齋藤 源次郎（さいとうげんじろう）です。
教育長 丹野 学（たんの まなぶ）です
このほか、別紙の名簿に記載のあります市職員が、出席させていただいておりますので、よろしく願いいたします。

3 市長あいさつ

（三保市長）

みなさま、こんにちは、本日は、何かとご多用にもかかわらず、二本松市未来戦略会議に、ご参集いただきまして、誠にありがとうございます。

また、日頃より、市政各般にわたりまして、格別のご支援とご協力をいただいておりますこと、心より厚く御礼を申し上げます。

この会議は、二本松市の将来の飛躍と恒久的な繁栄・発展を目指して、全ての市民が幸せを実感でき、50年先、100年先、次世代を見据えた礎を築くために、市の特性を活かした自律的で持続的な都市づくりに向けて、専門的な知識及び民間の経営的

な観点から各界、各層からの幅広い、ご意見、ご提言を頂くために開催するものであります。

新たな二本松市の未来を拓くために、急激に進む人口減少と少子高齢化対策、企業誘致による雇用拡大と市内経済の活性化、そして、原子力発電に頼らない再生可能エネルギーを中心とした電力の地産地消と環境推進都市の実現に向けて、「市民が主役、市民とともに」をスローガンに、市の改革を推し進めながら、50年先、100年先を見据えた新たなまちづくりを進めたいと考えております。

皆様には、豊かな見識と貴重な経験をもとに、これからの二本松市の飛躍と可能性について、長期的な視点、大所高所から、忌憚のないご意見ご提言を、ご提供いただければ幸いです。本日は、よろしく願いいたします。

(企画財政課長)

次に、若干の事務連絡を申し上げます。

本日の終了予定時刻は、午後4時とさせていただいておりますので、ご協力をよろしく願いいたします。

それでは、議題、意見交換に入りたいと思います。

4 コーディネーター（紹介）あいさつ

(企画財政課長)

ここからの進行は、コーディネーターといたしまして、福島大学副学長 伊藤 宏様をお願いしておりますので、前方にご移動をお願いいたします。

それでは、伊藤様よろしく願いいたします。

5 議 題（意見交換）

(1) 自己紹介及び地方都市の現状や地方振興への思いについて (それぞれの専門分野から)

(コーディネーター 伊藤副学長)

私は、福島大学で、研究や地域連携、就職を担当しております。副学長の伊藤と申します。二本松市内に居住しております。本日は、よろしく願いいたします。

それでは、早速、議題に移りたいと思います。

まず はじめに、(1)自己紹介及び地方都市の現状や地方振興への思いについて（それぞれの専門分野から）について であります。

本日の会議は、第1回目の会議で、初めて、お顔を合わせる方もいらっしゃるでしょうから、皆様より、簡単に自己紹介をしていただき、議題 (1)にあります「地方の

現状について」皆様のそれぞれの、分野から注目している点や、地域づくりへの思い等を、お話しを頂ければと思います。

お一人様、3分程度でお願いできればと思います。

それでは、名簿の順番に、順次お願いしたいと思いますので、初めに黒川様、お願いできますでしょうか。

(黒川 清)

私は、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故の国会事故調査委員会の委員長を務めさせていただき、7年が経過しましたが、日本の政治は全く変わっていないと、世界から見られているのではないのでしょうか。

この事故は、世界的にはアジアの三大大事故と言われておりますが、日本は、歴史から何も学ばなかったのではないかと、私は感じております。

二本松市は、朝河貫一博士という偉大な先人の出生の地でありますので、博士のことを学び伝えていってほしいと考えております。

(安齋 隆)

私は、この地元出身でありまして、私の故郷は、私が選んだのではなくて、宿命的に、私の親と故郷は決まっておりました。そこが、良いとか悪いとか、言う資格は私にはありませんが、私は、いつなんどきでも故郷が気になってしょうがない存在であります。ですから、震災が起こった時には、私は、二本松だけでなく福島県民みんなに、自分が悪いことをしたわけではないので、顔を上げて、まっすぐ前を向いて、上を見て歩いてほしいと、言ってきました。

ある新聞に厳しい言葉が載っておりましたが、自分の故郷、自分のまちをどうするかは、そこにいるみんなが考えてやってください。人に頼って、どこまでも頼ってはだめですよ。と言っています。

そのために大事なものは、私は、教育だと考えております。私は若者が一番大事だと思います。そういうことで、私にできることは精一杯やらせていただきたいと思います。

(栗田 充治)

亜細亜大学の学長をしております。私と二本松市との関わりであります。本学の初代学長の太田構造が二本松市ゆかりの人物であり、このご縁もありまして、昨年、二本松市と包括連携協定を結ばさせていただいたところであります。

私は、哲学とかそちらの方を専門にやってきましたが、ボランティアや災害救助、まちづくりについての授業も持っておりまして、その中で防災の授業の中で、学生と一緒に実際に現地に入って、体感することが効果があるとの思いから、2013年に二本松合宿を3泊4日で20名の学生と訪問させていただきました。

どうぞよろしく申し上げます。

(飯田 哲也)

日本全体が立ち遅れいている状況で、エネルギーや輸送交通部門であるが、日本では世界であまり注目されていない、水素燃料の自動車開発に力を入れており、すくし、世界とかけ離れているのかと感じております。

私の専門は、分散型のエネルギーで、これで地域は豊かになっていきます。

私は、エネルギーは地域分散型が適していると考えております。

二本松市もエネルギーの地産地消に取り組んでいくといことで、ぜひ、これを活用して地域づくりに取り組んでいただきたいと思います。

私は、2010年から2012年に福島県のエネルギーのアドバイザーを務めさせてくださいました。今度は、二本松市で何かお役にたてればと思いますので、よろしくお願ひいたします。

(堀内 光一郎)

富士急行の堀内でございます。私の会社は、富士山の麓に本社がございまして、よそ者ではございますが、安達太良山の麓にスキー場がございまして、設置させていただいたのが、46年前でありまして、私も当時から、お邪魔させていただいております。当時は、高速道路や新幹線もありませんでした。大きく発展をされたなと感じております。

会社のあります富士吉田市も人口減少が進んでありますが、富士山を最大限に活用しながらインバウンド等に力を入れており、地域活性化には有効な手段ではないかと思ひます。観光を軸にした未来戦略のために、お声がかかったと思ひますが、精一杯お役にたてますよう頑張つてまいりますので、よろしくお願ひいたします。

(糠澤 修一)

私どもの、福島テレビは、昭和38年に開局いたしまして、今年、開局55周年になります。私は開局と同時に入社をいたしました。大震災と原発事故で感じたのは、歴史に学び、先人に学ぶに尽きるとの思ひでありました。

平成16年に朝河貫一博士の顕彰を進めなければならないとの思ひから、320名で顕彰組織を立ち上げました。安達太良山に代表される、霞ヶ城に代表される歴史的遺産が豊富である二本松市を歴史的に見つめ直す、全市民一丸となって善処しようという気持ちが結集すれば、二本松市の明るい未来が待っていると思ひます。メディアの一員として少しでもお手伝いできればと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

(三浦 哲夫)

私どもの会社は、二本松市に工場が建てられてから46年から47年になります。もともとは三菱ふそうの鍛造部門が二本松に引越してきたわけでありまして、私も当初の鑄造部門の立ち上げから、こちらに来ております。

当初は三菱のほうから黙っていても仕事に来ていたわけでありまして、途中からは、系列ではなくなっていて、自ら仕事を見つけてこななければならなくなり、非常に厳しかったです。この時に自ら経営戦略を立てて実施してきました。このことが今となってみれば、よかったのかなと思っております。

(太田 英晴)

私は、代々、二本松市内で酒造りをやっております、今年からは物産協会の会長を仰せつかっております。亜細亜大学の創設者の太田耕造先生とは遠縁にあります。日本酒は酒類の国内市場においては、低迷しておりますが、20年ぐらい前から海外市場に展開しております、現在では、6番目となっております。日本酒はクールジャパンの重要なコンテンツとなっております。近年では酒蔵巡りもブームとなっております、その中で二本松市をどうブランディングしていくかという視点から何かお役に立ちたいと考えております。

(佐藤 興司)

丸や運送の佐藤です。私はこの前、5日間ロシアに行っていました。ロシアは、日本とはまったく比べものになっていませんでした。あらためて、日本の良さが認識できました。しかしながら、日本も、このままでよいのかなと思っており、将来に向けて考える時期が来ているのではないかと感じております。その中で福島県は原発事故に見舞われ、課題山積ではありますが、5年先、10年先を考えてやっていかなければならないと思っております。

(富樫 三由)

私は約50年縫製業に携わっております、現在国内では、縫製業が衰退し数パーセントしか残っておりません。私も、会社存続のために海外に進出してまいりました。また、海外からの実習生も受け入れておりましたが、昔は、実習生の賃金が低かったのですが、現在は、日本人と変わらない状態であります。

地域をどのようにして興していくかを考えたときに、若者、よそ者、馬鹿者は非常に期待するところでありまして。特によそから見た視点や価値観が重要であると考えています。本日は、市外からの方もおりますので、ぜひ感じたままを教えていただきたいと思っております。

(山崎 友子)

合戦場のしだれ桜の近くに住んでおりました、専業農家をしております。若いころに小さいビニールハウスを利用して農産物の直売を始めました。その後、道の駅としていただいたわけですが。何事も何かを成し遂げたいという強い思いがなければ実現はしないなと感じております。個人的には、市内の食糧自給率を300%にできればよいなと思っておりました、あらゆる生産者がみんなで頑張る、市の産業としていかなければならないと思っております。

二本松には富士山のような素晴らしい資源はありませんが、その中でも大切なのは「人」であり、魅力ある人材を育てていかなければならないのではないのでしょうか。

(関 元弘)

東和地区で、農業をしております。出身は東京であります。二本松に来て12年目になりました。この12年間で変わったところは、景観が崩れてきているのではないかと、耕作放棄地が増える、お葬式が増える、集落活動が停滞する、次の10年でどうなるんだろう、人口はもっと減っていく、克服するためには、生業をしっかりさせていく、持続可能なものにしていくことが必要ではないか。そしてそこにいる人を増やしていくことだと思う。

(吉田 和)

私は、黒毛和牛の繁殖から飼育を一貫してやっております。頭数は県内外で1,900頭ほどいます。これから二本松で何か違うことをやりたいと思って、黒毛和牛ではないブランドづくりをやってみたいと思ってる、牛で二本松に何か役に立てればと思っております。

(中野 真理子)

NPO法人こころの代表をしております。平成15年から子育て支援センターで仕事をさせてもらったのが、きっかけであります。NPO法人を立ち上げてからは11年になりました。子育てに関する様々な活動をさせていただいております。これからお母さんたちが子供を産んで安心して暮らしていける環境を作っていかなければならないと感じている。

(伊藤 宏)

私は福島大学に勤めて32年になります。出身は名古屋でして岳温泉に住んで24年になります。福島大学も震災からの復興や原発事故からの復興の方向に意識が高くなっております。もう一つ、農産物の風評被害の問題もありまして、来年から新しい学部を創設することになりました。食農類学部であります。

地域は若者がそれなりに定着してくれないと先細になることは明白であります。若者がいないと子供は生まれてこないし人口は減っていきます。福島県の学生が県外の大学に進学する割合は80%であります。この8割の学生がUターンで戻ってくるかといいますとなかなか戻ってきません。戻ってくるのは、2から3割であります。福島大学では学生を地元に着させようという取り組みも行っております。福島の良さや地元の企業を知ってもらうということもやっております。

そこで、住みたいまちにするには、どうして行くべきかということを考えていかななくてはならない。二本松に住んでいてもつたいないということが、いっぱいあります。活用されていない、いいものがいっぱいあります。うまくまちづくりとかに反映されていない、もつたいなさがあります。二本松市に住まわせてもらって恩返しもしたいと考えています。

(2) 二本松市のイメージ、二本松市の可能性について

(コーディネーター 伊藤副学長)

それでは、次の議題に移りたいと思いますが、普段、皆様が、感じておられます二本松市のイメージや風土、または、よそには無い、二本松市の宝や自慢できる地域資源などを、また、可能性につきましては、「こんなところに注目してみても」という点や、「こういった方向性の取り組みが必要だ」ということがあれば、ご発言を お願いいたします。一つ言えるのは、特徴のない地域というのは、よいとらえ方をするとバランスの取れた地域であるともいえます。強みの生かした特徴で、あれが二本松だ、と言えるようなところが必要と感ずますが、何かを始めるのにも人材が必要となるわけでありまして、人材の育成や確保が必要となってきます。

それでは、亜細亜大学の栗田先生から事前のレポートが提出されておりますので、ご紹介をお願いできればと思います。

(栗田 充治)

若者、馬鹿者、よそ者がまちづくりに必要なわけ～まちづくりで若い人に参加して貰う秘訣～・・・・資料に基づき説明

(コーディネーター 伊藤副学長)

ありがとうございました、今の話をお聞きしまして、最近の若者は、本気になって自分のことをやるということになってきていて、親から言われるとか先生から言われるとかして、行動するとかが強くなってきている。若者の力を使うということは非常に大事ではあるが、いかに本気で若者を動かせるのかが大切であると思う。

ただ今の栗田先生のお話に関連して、皆様から何かございますでしょうか。

(安齋 隆)

企業の採用でも、同じようなことが言えると思う。若者からの提案をどのように受け止めるかが、大事だと思う。若者の意見は大切にしたいと思う。しかしながら、中間層が押さえ込んでしまっているのも事実である。企業や市役所でも組織というものの中で若者がどのように動くかが、若者の意見をどのように活かすかが、課題である。また、若者に対して怒ることはできても、なかなか褒めることができていない。若者の能力を伸ばしてあげるためにも、褒めることも必要である。

(中野 真理子)

年に2回ほど子育てのイベントを行っているが、その時にお手伝いいただいている高校生とかにみられるのが、服装は自由でよいと言っているが、皆同じジャージを着てくる。震災前は、ミニスカートやヒールをはいてくる高校生もいたが、今はなくなっている。ボランティアをする側、される側の区別意識が強くなりすぎているのかなと思う。

(コーディネーター 伊藤副学長)

自分がこれでいいと思ってこうするのではなくて、人の目であったり、人がどう思っているかをすごく気にしています。何か失敗するとすごく落ち込みます、落ち込まないようにするためには、みんなと一緒にだと安心するわけです。家庭においても失敗しないように育てています。大事なものは成功体験も失敗体験も両方必要であり、失敗したときに、どう乗り越えるかということをおぼろげに思っていると思う。失敗しないようにと強くしすぎているのではないか。

最近では、就職の相談でも親がくる場合が増えている。失敗しないように、皆と同じようにと、過保護になりすぎている面がある。

(太田 英晴)

最近では、高校生などが人前で堂々と発表を行っていることも増えてきていると思う。話の内容も、素晴らしい意見を発表している。昔とは違って、そういうことのできる子供も増えてきているので、将来に希望が持てている面もある。

(コーディネーター 伊藤副学長)

それでは、飯田様からも事前のレポートが提出されておりますので、ご紹介をお願いできればと思います。

(飯田 哲也)

エネルギーに関する世界の潮流と二本松への期待・・・・・・・・資料に基づき説明

(コーディネーター 伊藤副学長)

ただ今の飯田様のお話に関連して、皆様から何かございますでしょうか。

(栗田 充治)

オーストリアでは、熱エネルギーの利用が進んでいるが、バイオマス等で、二本松市での可能性はあるのか。原発事故による放射能の影響もあると思うが。

(飯田 哲也)

放射能の影響で言えば、きちんと処理できる技術もあるが、最終的には放射能が含まれている灰は最終処分場で処理しなければならない。あとは住民のコンセンサスが得られるかどうかである。デンマークでは地域熱供給が進んでいる。

(コーディネーター 伊藤副学長)

100%自然エネルギーについて、コストの面もあるが、現実的に、二本松で見ると何年ぐらいの時間がかかるものなのか。

(飯田 哲也)

太陽光発電は6年半ぐらいで、全体の電力供給に占める割合が10倍になってきている。2021年には10%になる勢いで伸びている。

本当に死にものぐらいでやれば、10年ぐらいで達成は可能であると考えているが、政策とビジネスモデルによって変わってくる。

また、設備コストは下がってきているが、逆に設置コスト、例えば人件費等は上昇しているので、この辺のコストをどのように抑制していくか課題もある。

(安齋 隆)

この前の西日本の豪雨災害も見てわかるとおり、山林を切り開いて大規模な太陽光発電を設置したことにより、山林の水の涵養力がなくなり、土砂崩れ等が多く発生してしまった。そういう側面もある。太陽光発電の設置場所は自然を破壊してまで、進めるべきではないと思う。それぞれの住宅の屋根にすべて設置していったほうが良いのではないか。

(飯田 哲也)

日本の太陽光発電が爆発的に普及した一つの要因に、林地開発により山林に設置された影響もあると思うが、私は、すでに開発されている土地や、建物の屋根を優先して利用していったほうが、災害等のリスクは高まらないと思う。日本国内には、こういった未利用のスペースが十分にあると思っています。住宅の屋根等を活用するほうが、コスト削減にもなるので有効である。

(黒川 清)

これからの進め方ですけど、第一に国レベルでやらなくてはならないことの議論はやめて、市レベルで決められることとか、皆さんがやってほしいことを、次の会議までに書いて持ち寄って、市レベルでできることを議論していったほうが良い。国レベルの話、国の許可がどうのこうのと、そういうものは、この場の議論にはなじまない。市レベルで実現可能性が高いアイデアを出していったほうが良い。何かをするために、理想を追求するために国を動かさなければ出来ないようなことは、この場で議論してもしょうがない。

エネルギーに関しても、なぜ二本松市でやらなければならないなのかが、わからない。やる気になれば日本全国どこでもできるわけであります。亜ネル義をやるなということではないが、ここでの議論は、二本松市の特徴を生かして何ができるのかを話し合いたいと思う。

私は、二本松市出身の朝河貫一博士だと思う。彼が二本松で生まれたから、幼い時に過ごした二本松の風土が彼の根底にあると思う。彼のたどってきた軌跡や関係をもっと活用できると思う。毎年、イエール大学等に二本松市民が訪れているわけであり、このネットワークを使わない手はないと思う。国内にも、朝河貫一博士について研究している人もたくさんいる。そういった人材も活用できるのではないか。これは、二本松市でしかできないことだと思う。

(糠澤 修一)

人口動態の資料を見たが、昼間人口の問題、通勤通学で多くの市民が、市外に行っている。観光交流人口が震災後 7 年半でどのようになっているのか、昼夜二本松にとどまって生産活動に携わっている人口を高めないと市内の収入は上がらない。新たな企業誘致と雇用創出をどうしていくか。また、二本松市が、事件事故以外で福島テレビに登場した回数は、年間で 30 回も無い。菊人形や桜以外で、一般の市民生活や農業等の生産活動がニュースになっていない。きちんと二本松から県内全体や全国に発信していかなければならない。市の広報だけではなくて、市民レベルの広報戦略をどう考えるのか。交流人口をどう増やしていくのか、せつかくの観光地がだめになってしまう。少し視野を広げて議論をしたい。

(コーディネーター 伊藤副学長)

それでは、予定した時間となりましたので、次回は、二本松ならこんなことができるのではないかと議論いただきたいと思いますと考えております。

※事務連絡

(企画財政課長)

今後の日程でございますが、この「二本松市未来戦略会議」は、本年度3回の開催を予定しております。本日は、第1回目でありましたが、第2回目を11月8日の木曜日に開催したいと考えております。

第2回目では、必要であれば現地調査をしていただきながら、本日と同様に意見交換を行い。その後に、懇親会を開催したいと考えております。

現地調査については、希望のある方と、させていただきたいと思います。

第3回目は、来年の2月上旬に開催し、皆様からのご意見、ご提言を取りまとめたいと考えております。最後に三保市長より、挨拶を申し上げます。

(三保市長)

本日は、ありがとうございました。本日、出席いただきました各委員の皆様方に、これまでも、これからも、みんなで話し合う機会はほとんどないのではないかと思います。このご縁を大切に、新しい二本松市や市民の幸せのために、さらには、市の発展のためになる会議になればと考えております。皆様のより一層のお力添えをいただければと、お願い申し上げます、御礼のあいさつとします。

6 閉 会